

里山保全活動の経緯と今後の課題

保全協会が牽引してきた里山保全

文・写真 夏原 由博(会長)

全国における里山の歴史：

資源から負の遺産、そして資産へ

日本の里山の歴史は、数千年にわたる人間と自然の相互作用の歴史である。人々が野焼きや焼き畑などの植生管理を行うことで、草原や二次林といった「半自然」の状態が維持されてきた。江戸時代、里山は薪炭、落葉、飼料などを供給する生活基盤として不可欠な存在であり、村落共同体による厳重なルールの下で持続的に利用されていた。しかし、明治維新後の混乱や戦中・戦後の過剰な伐採により、各地に「禿げ山」が出現するほどの荒廃を招いた。

戦後の回復期を経て、1960年代の高度経済成長期に里山は最大の転機を迎える。石油やガスへの「燃料革命」および化学肥料による「肥料革命」である。これにより、里山は経済的価値を失い、林業政策の場では「低位生産力地帯」として酷評されるようになった。多くの里山が人工林へ転換されるか、都市近郊では住宅地やゴルフ場として開発される「負の遺産」あるいは「未利用地」と見なされるようになった。

1970年代、森林生態学者の四手井綱英が「農用林」を一般に分かりやすく説明するために「里山」という言葉を学術的に再定義し、原生的な自然とは異なる「人間と共生する二次林」の価値を訴え始めた。1980年代には身近な自然を守る市民運

動の旗印としてこの言葉が普及し、1990年代には「人の手が入ることで維持される生物多様性」の重要性が科学的に実証された。2010年の生物多様性条約COP10における「SATOYAMAイニシアティブ」の発信を経て、現在、里山は持続可能な社会モデルとして世界的に評価される環境資産となっている。

大阪における里山保全運動の胎動

全国に先駆けて「里山」を現代的な運動の言葉として定義し、社会に浸透させたのは大阪自然環境保全協会（以下、保全協会）である。

当初の運動は、箕面のニホンザルや北摂のシカの保護活動から始まった。1980年、箕面周辺の哺乳動物調査において、人里に近い雑木林や田畑といった「伝統的な農業環境」が動物の生息地として極めて重要であることが浮き彫りとなった。この環境を呼称する際、市民に親しみやすく、かつ「心の故郷」としての意味を込めて「里山」と呼ぶことが決定された。

1983年には大々的な「里山保全キャンペーン」が展開され、新聞やテレビなどのメディアを通じて「里山」という言葉が一般社会へ急速に普及し始めた。

里山シンポジウムと「保全と活用」へのシフト

1986年に大阪で開催された第1

回「里山シンポジウム」は、里山概念の大きな転換点となった。それまでの「野生動物の生息地を守る」という視点に加え、里山を「都市の機能」や「保全と活用」というより広い文脈で捉え直す提案がなされた。

シンポジウムでは、四手井綱英が里山の歴史的役割を解説し、高橋理喜男は、里山を二次林だけでなく、集落と農地、ため池、水路、二次林全体のモザイクと定義している。梅原徹は「放置された里山は常緑広葉樹林化して生物多様性が失われるため、適切な管理が必要である」と指摘した。この「放置による荒廃（アンダーユース）」への危機感、後の里山管理ボランティアの理論的支柱となった。さらに、里山を「人間形成の場」や「防災・景観機能」として再定義し、都市計画の中に計画的に取り込むべきだという先進的な提言も行われた。

重松敏則と市民管理モデルの確立

大阪での里山運動を支えたもう一つの重要な柱が、大阪府立大学で研究を行っていた重松敏則である。彼は1970年代から里山林の植生管理を研究しており、1991年に出版された著書『市民による里山の保全・管理』は、全国の保全団体の「バイブル」となった。

重松は、林業として成り立たなくなった里山を維持する新たな担い手として、都市住民やボランティアに



里山の景観



学生による作業風景

着目した。単なる理念に留まらず、英国のボランティア組織 (BTCV) の手法を参考に、安全管理、下草刈りや間伐の具体的手順、参加者の組織づくりなどを体系化し、日本における市民参加型自然保護のモデルを大阪から発信した。

特色ある里山保全活動

本特集では保全協会が主催、連携する6つの里山保全活動を取り上げた。

富田林の自然を守る会は1989年に設立され、1993年から「奥の谷」を拠点に活動している。人工林の間伐や竹林整備といった生態系保全に加え、国際ワークキャンプの受け入れや観察会などの文化的活動も幅広く展開している。市民・行政・地域住民の協働体制が特徴である。里山産物の事業化など持続可能な自然保護と地域づくりの両立を目指している。

妙見里山倶楽部は1991年に「里山管理者養成講座」修了生の実習地として始まり、現在は高代寺山中腹で活動している。放置された雑木林や竹林を整備し、暗かった参道を明るいハイキングコースへと再生させた。特に古木のサクラやモミジの救出・保全に注力し、名所作りを目指している。また、耕作放棄さ

れた棚田を野菜栽培やビオトープとして活用し、景観保全と農地再生を両立させた活動を行っている。

太子町葉室里山クラブはゴルフ場開発から自然を守る運動を背景に、1993年に結成された。育林整備だけでなく、里山コンサート、シイタケ栽培、お茶作りなど、会員の要望を最大限に取り入れた多彩な交流活動が特徴である。子供向けにターザンロープを設置したり、夏には国際ワークキャンプを受け入れたり、世代や国境を越えた多様な人々が日常的に自然に触れ合える場を提供している。

紫金山みどりの会は2000年に設立され、コバノミツバツツジの保全を主眼とした常緑樹の伐採やネザサ刈りを行っている。2025年には「自然共生サイト」に認定された。地元の小学校への学習支援や親子観察会など教育活動も活発で、会員数が増加傾向にある。

五月山グリーンエコーは1996年に創設した「里山公園管理プロジェクト」のモデル地が母体である。生き物の生息地保全を第一とし、常緑樹の除間伐や「炭焼き小屋コース」の管理、モニタリング調査など多岐にわたる活動を展開している。地域交流も盛んで、小学生対象のプログラムやピザ窯の活用も行って

いる。

歌垣SATOYAMA楽舎は特産の「銀寄栗」の栗園を核に、自然・文化・人を結び直す活動を行っている。専門家と市民が連携する「市民科学」の観点が強く、絶滅危惧種キマダラルリツバメの科学的データ収集にも貢献している。放棄された栗園を、生態系と生業が両立する場として再生させている点がユニークである。都市住民も担い手として巻き込み、地域固有の農業文化や景観の継承に取り組んでいる。

未来への展望

大阪の里山は、都市の圧力の中で失われかけた自然を市民の力で再定義し、守り抜いてきた歴史を持っている。大阪の里山活動は、単なる自然保護を超え、多様な社会的課題の解決へと結びついている。地産地消や農の場としての活用、子供たちの教育、高齢者の健康維持、そして防災機能の強化といった「地域のまちづくり」の指針として5つの提言（都市機能、生物多様性、食料生産、健康・余暇、文化継承）が示されている。この「大阪モデル」は、次世代へ技術や文化を継承する新たなライフスタイルの提案として、これからも進化を続けなくてはならない。

表 保全協会関連の里山保全ミニ年表 (作成: 木村 進 (編集委員会))

1993年	★●太子町葉室里山クラブ (活動場所: 太子町葉室地区、代表: 小路公之)	数字: 発足年
1993年	★○富田林の自然を守る会 (活動場所: 富田林市彼方 奥の谷、代表: 上角敦彦)	★: 本号に紹介記事掲載
1994年	○神立里山保全プロジェクト (活動場所: 高安山山麓、代表: 千葉昌幸)	●: 現在協会グループ
1996年	★○五月山グリーンエコー (活動場所: 池田市五月山山麓、代表: 中川勝弘)	○: 現在の友好・提携団体
1999年	★●妙見里山倶楽部 (活動場所: 高代寺山実習地、代表: 井上登喜夫)	代表者名: 確認日現在
1996年	野崎・飯盛の山と緑を保全する会 (活動場所: 野崎観音の裏山、代表: 山崎充宣)	
	⇒2022年～●野崎観音・里山保全の会 (場所: 野崎観音の裏山、代表: 劉岱) に改組	
1999年	★○紫金山みどりの会 (活動場所: 紫金山公園、代表: 武田義明)	
2008年	●穂谷里山保全チーム (活動場所: 枚方市穂谷地区早稲田、代表: 野田奏栄)	
2001年	神於山保全くらぶ (活動場所: 岸和田市神於山、代表: 田口雅士)	
2001年	○交野里山ゆうゆう会 (活動場所: 交野山森林公園、代表: 金川信明)	
2012年	交野みどりネット (活動場所: 星田ふれあいの森・奄山ふれあいの森・他、代表: 北迫令子)	
2017年	★●歌垣SATOYAMA楽舎 (場所: 能勢町歌垣「銀寄栗の森」他、代表: 湯浅淳子)	
2025年	●穂谷自然再生プロジェクト (活動場所: 枚方市穂谷地区、代表: 夏原由博)	
※参考文献: 保全協会 里山グループ紹介集 (里山委員会作成、2017.5.13)、各グループのホームページ		

妙見里山倶楽部

文・写真 井上 登喜夫 (妙見里山クラブ代表)

大阪自然環境保全協会の活動の一環として、里山管理者養成講座修了生の実習・研修の活動拠点として、1991年1月に大阪府豊能郡豊能町の民有地を借用し、上光ヶ谷里山管理実習地を設立しました。1998年4月より、名称を妙見里山倶楽部に改名、実習地を大阪府豊能郡豊能町の民有地に移転、保全協会の里山関連グループとして、修了生や参加希望者を受け入れています。また2004年に高代寺山中腹の耕作放棄の景観再生を目的に棚田活動を開始しました。

活動内容

1. 里山整備活動 (第一・第三日曜)
高代寺は昔、本堂の他に十二坊があったと云われ、その跡地や薪炭林、雑木林と思われるところが荒れ果てていましたの

で、竹藪の整備、雑木林の間伐、徐伐作業を精力的に行ってきました。また、景観の良さを生かした遊歩道も整備し散歩コースとして利用いただいています。伐採したクヌギやコナラを活用して原木シイタケを栽培しています。春にはタラの芽、コゴミ、カンゾウ等が収穫できます。

2. 棚田活動 (毎週金曜日)
耕作放棄された棚田を耕作地として復活、野菜の栽培やお花

畑、ビオトープを作る等の活動を行っています。

今後の課題

- ・会員の高齢化 現在会員は25名ですが平均年齢が70歳を超えていますので新しい会員の募集が急務です (活動場所までの移動に苦勞するありさまです)
- ・里山・棚田の獣害対策 イノシシ、シカ、ノウサギ、アライグマ、ノネズミ対策



伐採中の竹林 (2014.7.6撮影)



10年後の同じ場所 雑木林になりつつある (2024.7.7撮影)

歌垣SATOYAMA楽舎

文・写真 湯浅 淳子(歌垣SATOYAMA楽舎)

荒れる里山を憂えて保全協会主催の市民大学講座を受講したのは2011年、それからじっくり温めた移住の夢が2017年秋に実現しました。歌垣山の麓、旧能勢街道に面して建つ250年を経た古民家です。能勢への移住は能勢地域での自然環境及び生物多様性の保全に取り組む保全協会のための活動拠点になれたらとの思いがありました。古民家を「歌垣SATOYAMA楽舎」と名付け、いろいろな講座や観察会や調査研究のためのオープンスペースと位置づけ活動が始まりました。

実際の活動は、2019年春から歌垣にあるクリ山「銀寄栗の森」にて、(公財)大阪みどりのトラスト協会との協働で保全活動に取り組む事になりました。銀寄栗の再生として早春の苗木の植樹に始まり、夏には下草刈に汗を流し秋にはクリ拾い、冬に剪定と作業を続けてきました。活動地はこの地と地続きで北隣の「小早川クリ園」、2021年度からは近隣の「正林寺クリ園」の提供を受け栗の苗木を植樹しました。

2022年には北側に地続きで繋がる「矢田クリ園」も活動地となりました。クリ山の整備の中でも特に下草刈りの作業が人の手の入ったクリ山の草地をつくり、これが永年維持されつづけたことが能勢の生物多様性日本一の源となっています。活動に並行して大阪公立大学大学院農学研究科准教授上田昇平先生主導のキマダラルリツバメ(大阪府絶滅危惧I類)生息調査が始まり、毎年講演会と観察会を開催しています。その後も楽舎はいろいろな調査研究のための拠点として利用されていて2025年にはタガメの調査研究、そして今年度はナゴヤダルマガエルの調査がこのところ毎週行われていて結果が楽しみです。

楽舎では2020年から近くの畑を借りていろいろな農作物の育成に挑戦していて、日々農作業にてんてこ舞い、加えて2025年からは田んぼを借りてお米作り(3.5反)を始めました。田植えの後の水管理、チェーン除草やばかしたい肥作り、一年で6月が一番忙しい季節です。人生で初めて自

分で作った米を食べる事ができて、その境遇に感謝しています。それにしても獣害対策に年々手を取られるのが悩みの種です。畑も田んぼもクリ園も獣害対策をしない事には前へ進めません。そしてそれはこれから守っていかなくてはならない希少な生き物たちにも同じことが言えます。

能勢の中でも特に倉垣あたりは絶滅が危惧される生き物の宝庫であることがわかってきています。今後、この地域のクリ園や田んぼ、草地にいる大事な生き物の維持管理をだれがいかにして永続させていくかが大きな課題となってきました。具体的な方向が見いだせるよう皆様のご協力を支えに能勢のこれからに少しでも貢献していくことになればと思い日々暮らしています。里山の自然を身体じゅうで感じて、味わって、浸る。ここでしかできない事をやってみる。ここが好きな人が集まり、いろいろな保全活動が続けることが出来ています。圧倒的な能勢の自然、雨も雪も日照りもみんな愛おしいと感じています。



講座や観察会開催の様子



楽舎近くで見られる生き物

太子町葉室里山クラブ

文・写真 小路 公之(太子町葉室里山倶楽部代表)

発足の経緯

1993年 地域のゴルフ場反対運動より地主と地域の支援団体との協力により、20ヘクタールの雑木林・竹林を保全する目的で「太子葉室里山クラブ」を立ち上げ枯れ松の除伐や草刈りなどを始める。

1999年 「第1回どんぐりまつり」を行い、子ども達の観察や体験活動も取り入れる。

2001年 青少年野外活動「国際ワークキャンプ」の受け入れサポーターとして16年間行う。

2017年 この頃から間伐や草刈りなどの活動地域の拡張に伴い、林床が明るくなり季節に応じた草花も多く咲き、昆虫などの生き物も増えてきた。

現在の取り組み

・里山保全活動：

毎週2回(日曜・水曜)

雑木林の整備(朽木の伐採、草刈り)、観察路の整備等間伐により林床が明るくなり在来植物

や生き物(昆虫)が増えてきた。

・里山探検隊：月1回年12回

子ども達とその家族を対象に里山の自然観察や体験活動を行う、自由遊びも好評。現在は幼児～小学生高学年、中学生になっても参加している。保全スタッフの手作りの「ツリーハウス」・「ドラム缶イカダ体験」も好評。

・特別例会：年2回

「お茶摘み、お茶づくり体験」「ナツハゼの実採取とジャム作り体験」大人も子どもも対象

・記録

「里山かわら版」を毎月発行して例会の状況を会員や参加者に発信

・広報活動

太子葉室里山クラブのチラシ配布。保全協会のホームページに「里山探検隊」掲載

・会員募集中

年会費1,500円(活動支援)

今後の課題と方向

1) 雑木林の再生「どんぐりの森作り」

・33年の経過で当初の樹木が朽木化して伐採が多くなってきた、地

主とも相談して雑木林の再生を目指す。

・特に斜面の地盤強化に伴い根張りの強いクヌギを育てる。

・里山探検隊参加の子ども達に自然に触れる体験をしてもらう。

「どんぐりで遊ぼう」どんぐりの種まき、クヌギの幼木の植え付けを行い育てて観察して「どんぐりの森」を目指す。

「カブトムシの家作り」落葉を集めてクヌギやコナラの樹液を好むカブトムシの家作りを行う。

(以前はカブトムシの幼虫が多く巣立っていた)

2) 「ナツハゼのジャムづくり」

引き続き自生しているナツハゼ(ツツジ科)の木を育ててジャムづくりを広めていく。

3) 「お茶畑の充実」

地主が育てたであろう茶の木を剪定し、新茶を多くの人に楽しんでもらえるようにしていく。

4) スタッフの世代交代

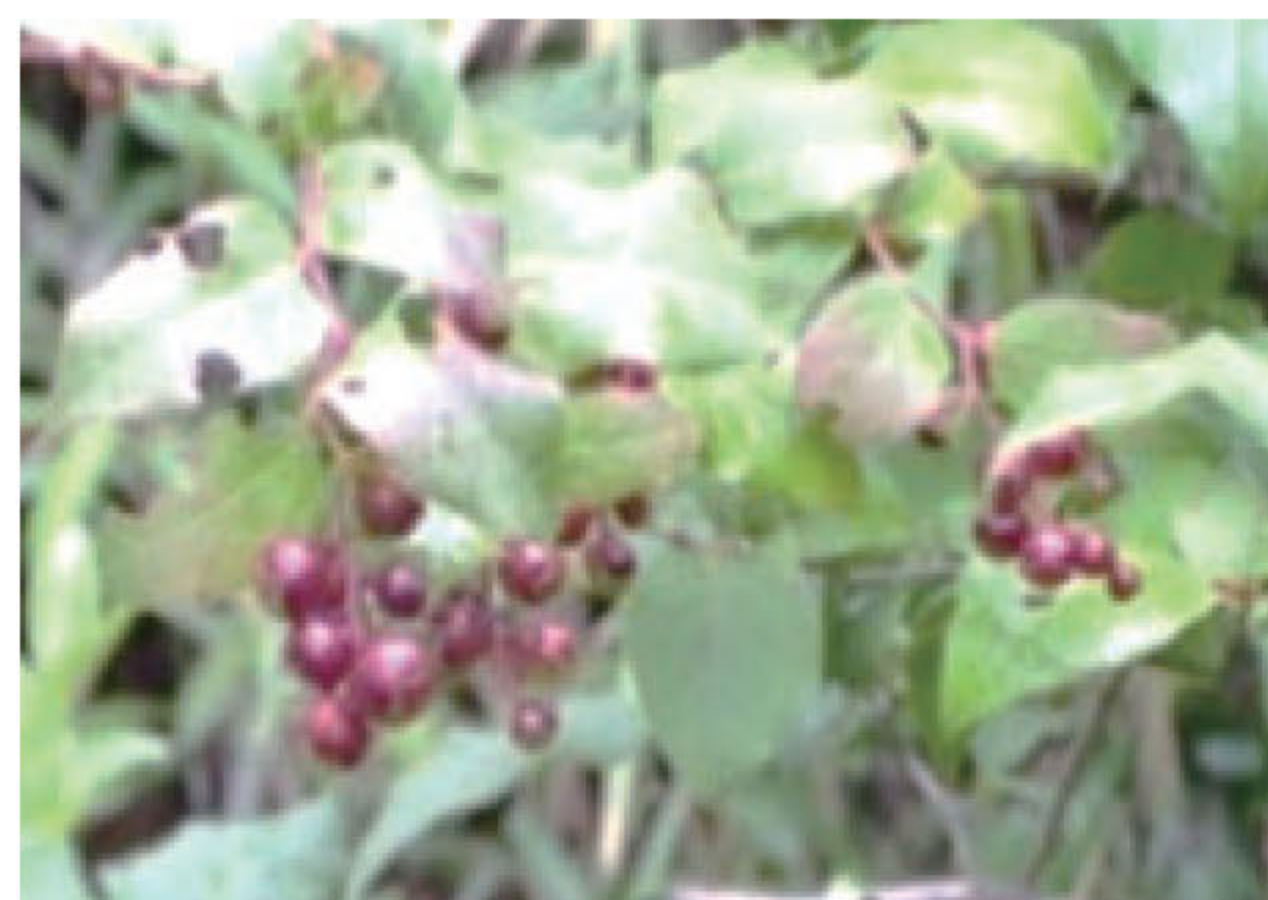
当初からのスタッフは高齢化してきているので、中心となる若いスタッフを育てていきたい。



お茶摘みとお茶づくり体験



落ち葉を集めてカブトムシの寝床作り



ナツハゼの実

五月山グリーンエコー

文・写真 中川 勝弘(五月山グリーンエコー代表)

五月山グリーンエコーの活動は、1996年に日本財団の補助を受けて、市民参画による森林整備、公園管理を行う、当保全協会の里山保全活動事業「里山公園管理プロジェクト」のモデル地として、池田市と共同で創立したのが母体となり、5年間の取り組みの後に自立、池田市のNPO市民団体として今に至っている。

その取り組みは、生き物の生息地としての五月山の保全を第一に考え、常緑樹中心に高木層も含めた樹木等の除間伐、草刈り等による林床整備、植樹、竹林整理、自ら新たに開設した「炭焼き小屋コース」と言う観察路の管理などを活動の基本として、2008年よりモニタリングサイト1000里地調査活動の実施。広場に設置したピザ窯などを使った地域交流の場としての保全地の活用促進や、地元小学生対象「里山あそび隊」という自然体験プログラムのサポートの他、池田・人と自然の会や園芸高校の協力を得て野草圃場の展開など、多岐にわたる。活動の課題は何といっても人の面、メンバーの高齢化による相次ぐ離脱、新たな入会者は少なく、会は年々先細りの状況に陥っている。特に50代以下の中〜若年世代の参加はほぼ皆無であり、作業自体は動力化である程度は補っては来ているが、それもそろそろ限界、10年前からの状況が益々深刻になって、将来の活動継続が危うい状況だ。

会の方向性は初心忘れず、生き

物目線の保全活動を継続して自らも作業を楽しみ、市民が日常的に自然に触れられる場の維持、創出を目指している。とにかくその為に活動を続けて行くことが実際問題としての目的ではあるのだが、人手不足がそれに重くのしかかる。

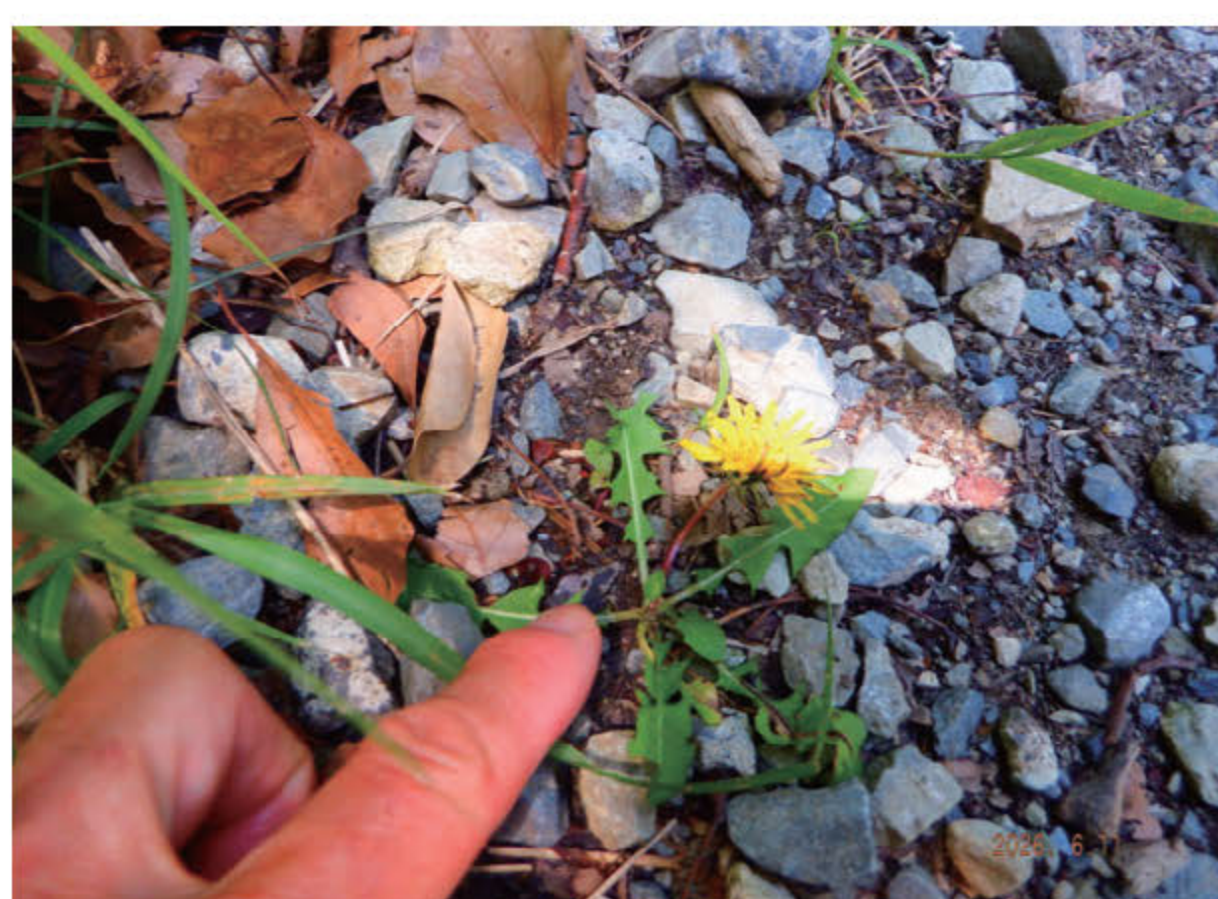
山自体も温暖化、外来種問題など様々な要素で状況は移り変わっていく。特に増殖するシカの問題が喫緊の大きな課題で、林床の植物は激減、僅かに残った野草もミニチュアのように矮小化した状態で、幸運にもシカの口から逃れた希少種が無情にも盗掘という憂き目にもあう。もはや本当に残したい場所だけでも、最後の手段として防鹿柵を張り巡らすしか林床植生を守る手立てはない。

また年々表土むき出しの所も増

え土砂流失も起こり、高木層の根も露わな危険斜面も拡大中で災害の恐れも高まっている。さらに、植生の劣化は昆虫類や野鳥類にも影を落とし、ウグイスなども近頃では、町に避難したのか、公園や邸宅の生垣の茂みで囀りが聞かれる。その影響はテンなど哺乳類にも及び、今や山はサイレントマウンテン化、ドミノ倒しの様に逆進的に低下して行く生物多様性は如何ともしがたい。それに加えてクビアカツヤカミキリの池田市内での発見や、ツキノワグマの出没もそろそろ想定しておかなければと言う、会設立当初には想定外の事態も絵空事ではない。だがこの先どうして行けば良いかは霧の中。ただ出来る事を、出来る時に、出来る分だけ、地道に活動を続けて行くしかない。



活動の拠点となる、すがたに広場の奥の1999年当時(左)と現在(右)の様子。斜面全体に下層植生の衰退がよく分かる。



矮小化しているタンポポ。高密度シカの生息地では成長と繁殖とのトレードオフの結果。



高木化した常緑樹の間伐で花付きが良くなったモチツツジ。

富田林の里山保全活動

文・写真 田淵 武夫(富田林の自然を守る会 相談役)

里山保全活動の始まり

1) 「子どもまつり」の打ち上げ会での雑談から

1988年11月、市民団体主催の子どもまつりの打ち上げ会で自然破壊が話題となった。1989年1月に準備会を立ち上げ、6月に富田林の自然を守る会(守る会)を結成した。

2) 木下陸男氏の講演と里山入門講座

結成総会で、木下陸男氏(当時保全協会副会長)に「身近な自然と私たちの暮らし」と題して講演をいただいた。この中で、自然観察が大切であること、自然保護をまちづくりに位置づけること、運動全体が楽しいものであることなどを話され、里山保全活動を紹介された。

私たちは活動をどう進めるかわからないまま、とりあえず自然観察会に取り組んだ。1991年には保全協会主催の里山入門講座を受講した。しばらくして山林の地権者と親しくなり、1993年から奥の谷で里山保全活動を開始した。

里山保全活動取組みの経過

1) 国際ワークキャンプ

(NICEとの協働)が転機に
当初は雑木林の下伐りを中心に

細々と取り組んでいたが、転機が訪れたのは1999年にNICE(日本国際ワークキャンプセンター)が主催する国際ワークキャンプを受け入れたことである。このキャンプでは世界の若者が1~2週間泊まり込んで里山保全活動を行った。2005年にはNICE富田林チームが作られ、毎月1回の週末ワークキャンプや諸団体のワークキャンプも受け入れることとなった。

2) 富田林市との協働が始まる

守る会は発足以来、市に自然保護施策を充実するよう要望してきたが、2002年に市は富田林の自然を守る市民運動協議会を設置した。協議会の主催で自然観察会、里山ホリデー(保全作業)、野草を食べる会などの自然に親しむ催しが行われるようになった。

3) 保全協会との連携

2004年から自然環境市民大学を、その後、インストラクター養成講座、新・里山講座、カレーライスを本当に手作りするプロジェクトなどを受け入れている。2012年からは保全協会の提携団体となった。

また、大阪シニア自然カレッジからも里山保全活動に多くの方々が

参加している。その他いくつかの団体からの講座や事業などを受け入れている。

4) 守る会の活動で心掛けていること

①安全第一 ②生態系保全活動、文化的活動、調査・提言活動を一体的にとらえる ③行政、地域、諸団体との協力・協働を大切にする ④自然保護をまちづくりに位置づける ⑤調査に基づく政策・提言を行う ⑥地権者や地域の人からの信頼を得る ⑦府、国、世界の情報を知る ⑧依頼には可能な限り応じる ⑨夢を持ち続ける。

里山保全活動の今後の課題

①里山観察路の整備 ②里山保全の意義を市民に広める ③新たな活動の場として里山を活用する ④里山の産物の有効活用 ⑤森林環境譲与税の活用 ⑥保全地域として確立する(自然共生サイト、里山公園など)。

これらの活動を通じて、多くの人々が参加するようになり、2025年度は子どもたちを含め延べ約3,100人が参加した。



2010年の国際ワークキャンプの参加者たち



数10年放置された里山の整備作業(まずは倒木の整理から)

紫金山みどりの会

文・写真 塩川 典正(紫金山みどりの会代表)

紫金山みどりの会の活動のきっかけとこれまでの経緯

- ①1989年吹田市が突然市報に「総合公園計画」を発表し、紫金山公園を都市公園化して里山ゾーンの田んぼを潰し水道橋や噴水などの大型人工物を建造するとした。その計画を見た市民達が立ち上がり専門家を招いて、複数回勉強会を開催。吹田市在住の大阪自然環境保全協会のメンバーが中心となり「吹田自然観察会」を設立し、自然環境保全、生物多様性保全、里山として保全、コバノミツバツツジの保全を掲げて市に要望書を提出。
- ②1997年「紫金山公園植生生態調査」を保全協会が受託。
- ③1998年保全協会が公園の里山管理を受託し管理組織として「紫金山みどりの会」が発足。
- ④2000年保全協会が「風土記の丘 基本計画」策定を受託。
- ⑤2001年8月号の市報に「風土記の丘」基本計画が掲載され、その市報に「市民参画の成果 開発型から自然を守る計画に」とのコラム掲載。骨子は「歴史、民俗の継承」「生物多様性保全」「大規模な施設や建造物は設置しない」等。

- ⑥2000年3月4日に会則が制定され「紫金山みどりの会」設立
- ⑦2004年吹田市より当会の保全活動を顕彰された。
- ⑧2012～16年ナラ枯れ被害1211本、内152本が枯死(12.6%)。
- ⑨2018年台風21号の被害甚大で高木常緑樹多数倒木があり、結果的に事後、コバノミツバツツジへ日光が当たるようになり、3月下旬～4月上旬は約700株のコバノミツバツツジが満開となり多数の市民が花見に来訪。
- ⑩2025年5月みどりの日に自然環境保全に尽力したとして、環境省よりいきもの環境づくり・みどり部門の顕彰を受けた。
- ⑪2025年9月16日「自然共生サイト」に正式認定。環境省、農林水産省、国土交通省の3省共同認定。

現在の取り組み

- ①毎月第2土曜日を活動日(8月は休み)と定め、主にコバノミツバツツジ保全のため、常緑樹の伐採、ネザサの刈取、梅林の手入れ、散策路の整備、親子対象に、自然観察会を実施、自然環境学習支援として隣接の岸部第二小学校向けにも年に数回観察

会を実施。

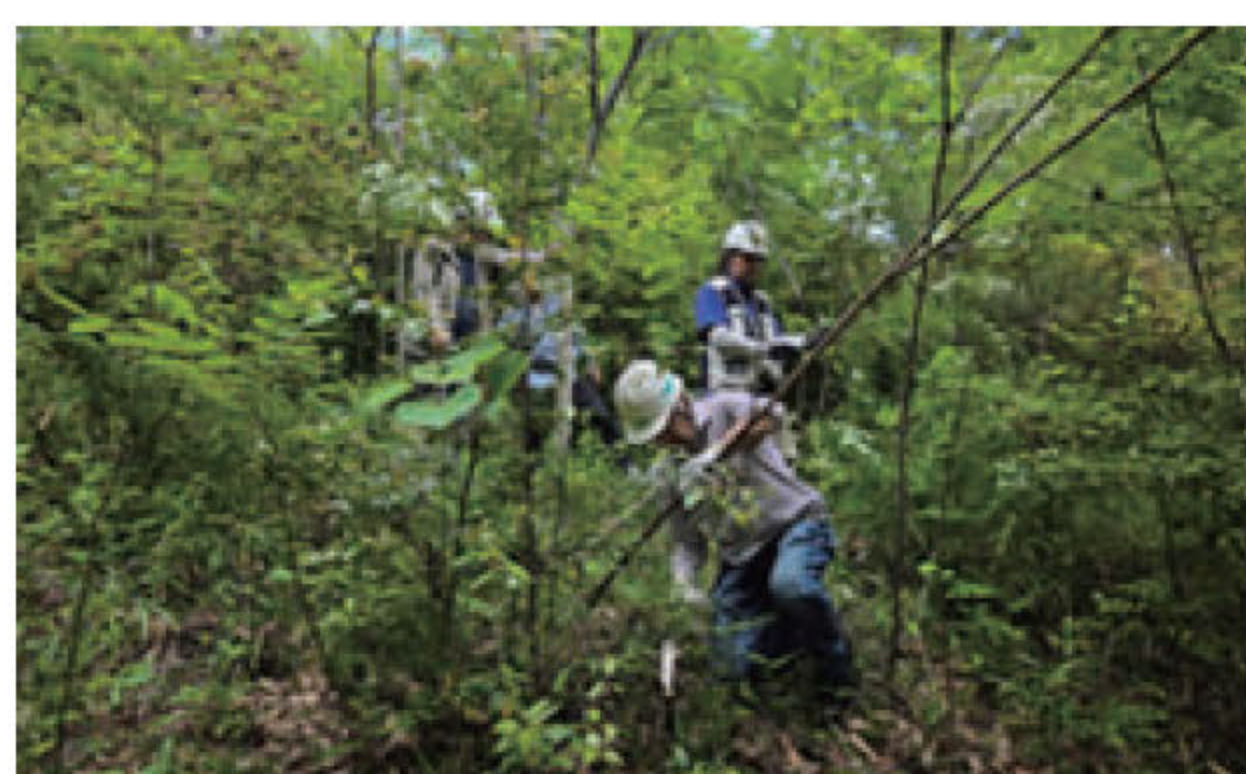
- ②2026年5月9日総会開催時点の会員数46名。直近3年は増加傾向。約1/3が新メンバーでお互いの名前が分かるよう名前の記載呼び掛け中。

今後の課題と方向性

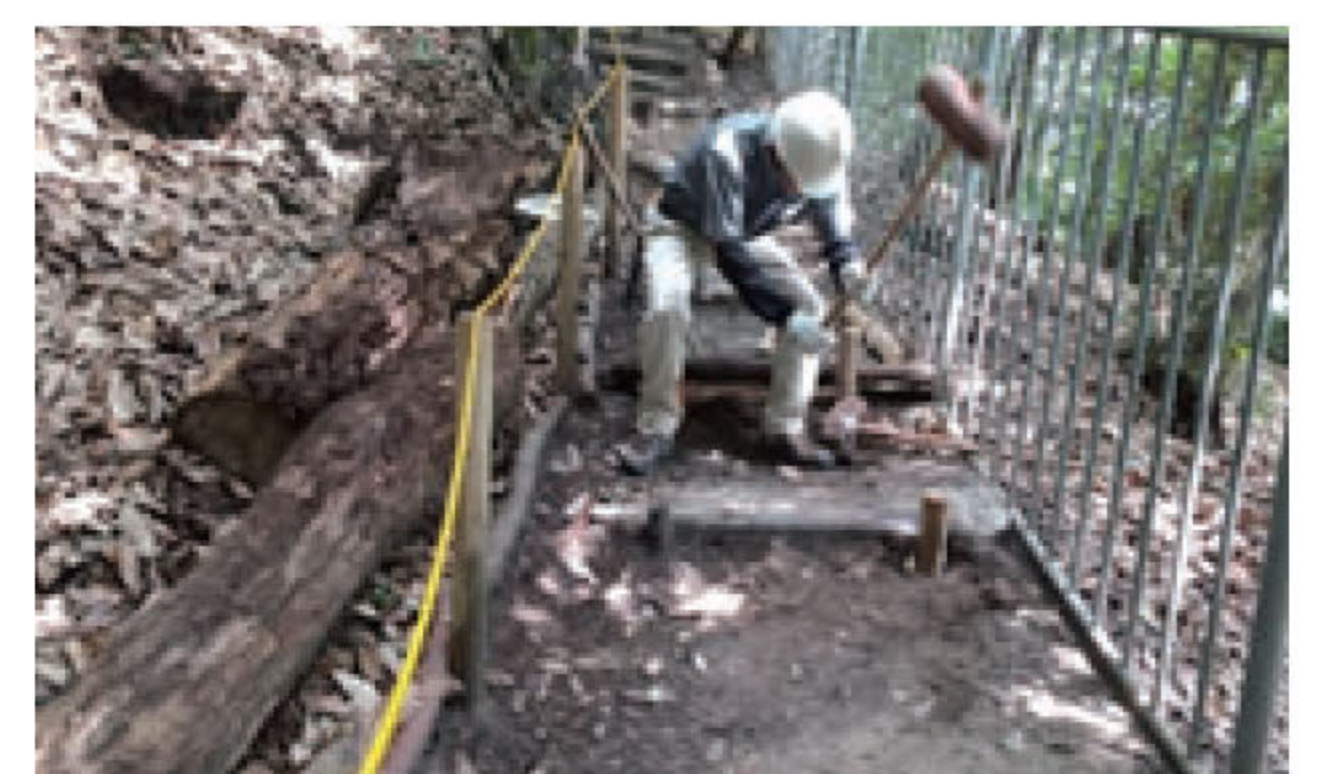
- ①今年度中に市(公園みどり室)と指定管理者の選定に向けてのヒアリングがあり、この指定管理者が紫金山公園の保全管理に関しどこまで出来るか、当会との作業分担/連携など、従来の我々の活動を支援してくれるよう交渉必要。
- ②コバノミツバツツジの現状は、良く花を付けているが、更新されていないため新たな苗を育て移植するなど更新を計画的に推進する必要がある。
- ③他の希少植物ツクバネウツギ、ザイフリボク、ナツハゼ、ヤブムラサキ等の保全、増殖が必要。
- ④コバノミツバツツジだけを残すのではなく、適当な間隔で夏緑樹、アカマツの高木を育成。
- ⑤会員を対象に年2回ほど観察会を行い、管理状況の確認、植物など紫金山公園の生物についての知見を高める。



5月の定例作業前の集合写真、この日は午後から吉志部神社の参集殿で総会開催



コバノミツバツツジに日光が届くよう常緑樹の処理



経年劣化で傷んだ散策路の補修作業